

# 方谷先生を訪ねて

児玉  
享



て先生の銅像が建立されました。先生の威徳をたたえて、没後五十年に高梁方谷会が設立されました。現在は各地で方谷会や研究会が出来る方谷先生の学問・思想・業績を学んでいます。(以下敬称略)

### 修業時代—学ぶ—

二〇〇五年は山田方谷先生の生誕二百年にあたりました。先生は文化二(一八〇五)年、高梁市中西町西方に生まれ、幼名は阿燐、名は球、字は琳卿、通称は安五郎、普通、号の方谷と呼ばれています。先生は江戸時代末期に負債で苦しんでいた備中松山藩の財政を建て直し、民生を安定させ、学問を大いに勧めた人として有名です。

その徳をしのいで明治四十三年中井に方谷園が盛大に開園し、翌年方谷林公園、大正三年方谷橋、昭和三年方谷駅と先生の名を持つ施設が誕生し、昭和五十一年高梁市郷土資料館前に没後百年を記念し

方谷の父は先祖が武門であったのに農民になったので、学問による家名の再興を強く願い、長男の方谷に期待して、小さい時から学問の手ほどきをしました。母はそばで頭を撫でながら「いとしい児よ、必ずお父さんの志をなしとげるのだよ。でも時の勢に乗って独りで走りすぎると、つまづくものだよ。お願いだから生涯を立派に終えておくれ」とやさしく論じています。

方谷は幼少の頃から書を学び、特に太字が立派で、四才の頃、板に大書して



方谷橋と奥に見える方谷林公園

各神社に奉納しました。方谷誕生の地である中井町の公民館には「天下太平・国土安全」の奉納額があり、親として国の平安を願う気持ちがかがえまします。

五才で親元を離れて新見に行き、優れた儒学者丸川松隠について学問を学びます。九才の時、客が「何のために勉強するのか」と問うたのに対し、即座に「治国平天下」と答えて驚かせています。当時学んでいた学問は儒学、厳密にいうと朱子学です。方谷はその真髄を端的に答えたので、「松隠塾に神童あり」ということになったのです。

しかし、学習の基礎がやっとできた十四才で母を、十五才で父を失った方谷は一家の生活を支えるため家に帰らねばなりませんでした。農業と菜種油の製造販売に励むかたわら、学問を忘れず努力する姿が藩主である板倉勝職に聴こえ、二人扶持(一日米一升)が与えられ、有終館での学習を認められ、将来藩のため尽くすように言われました。この奨学金をもらったことで念願の遊学が可能となりました。学問・人間を磨くために二十三才と二十五才の時半年ずつ、松隠の学友、京都の寺島白鹿の門に入って勉学にいそしんでいます。京都から帰ると藩から苗字帯刀を許され、八人扶持を与えられ、中小姓格、有終館会頭を命じられています。ついに父が念願した武門に入ることが出来たのです。

しかし、方谷はこれに満足せず、あくまで自分の修業のため学問研究をめざしました。八人扶持をもらったことで長期遊学が可能となり、二十七才から二年間、白鹿のもとでの三度の時自分で物事を判断し行動する陽明学を知り、その学習を深めるため、さらに三年間江戸の佐藤一斎の塾で勉強しました。この塾には天下の俊秀が集まっていたのですが、方谷は学力・人物が認められて塾頭になり、佐久間象山とこれからの世の中には洋学と儒学のどちらが有用かなど毎夜激論したといわれています。

このように自分の心を鍛え社会を良くするため学問追求で学ぶべきことを学び、天保七(一八三六)年学を終えて帰国しました。その時は三十二才になっていました。



「天下太平・国土安全」(中井公民館蔵)

## 有終館学頭時代―教える―

天保七（一八三六）年九月、三十二才の山田方谷は三年の遊学期間を終え、藩主勝職に随って帰藩しました。十一月に有終館の学頭（校長）に命じられ以来十数年、藩士教育に専念することになります。

方谷が学び教えた儒学は、修己治人の学といわれ、孔子・孟子（二千四、五百年前）が乱れた世の中を平和で安心して暮らせる社会にと説いて歩いた学問で、修業により徳のある

人間になり、国を治め、平和な社会をつくる、治国・

平天下を目指した学問です。彼は先人の教えを学び、その知識をもって正しい行いをする朱子学から、実行に際して自分の心の判断を重視し、誠意をもって物事に対処する陽明学へと進み、中国の歴史を研究し、多くのことを学びとりました。その上で幕府の教育方針に従って朱子学を教えました。

板倉勝澄（初代）は松山藩主となつてまもなくの延享三（一七四六）年、御殿坂のほとり（現・日新高校校庭）に学問所を開き、四代勝政はそれを有終館と命名し、藩校として確立します。天保二（一八三一）年の火災の後には中之町（現・高梁幼稚園）に場所を移しました。しかし、天保七（一八三六）年方谷が学頭になつた当初は、藩士の学習意欲は乏しかったといわれています。御前町に賜った自宅に天保九（一八三八）



藩校、有終館跡

年に牛麓舎（塾）という家塾を開きましたが、松山藩では家塾を知る者はなく、藩士で受講する者は文弱とそしられ、書物を懐に隠して通つたといわれています。しかし、遠近より学問を求めて常に数十人が入塾して学んでいました。牛麓舎の塾規に「職業三条―立志・励行・遊芸」が掲げられ、学問を専門に学ぶ人は、まずしっかりと志を立て、学問修得に専念し、教養を高めて詩文など芸の世界で楽しむことを目指し、わき目も振らずに勉学する者だけに在塾を認めました。特に冬は夜の時間が長いので、勉強するの

に適しているから励むようにと指導しています（江戸時代は日の出と日没の間を等分して時刻を決めていたので、冬は昼の時間が短く、自習する夜の時間が長い）。牛麓舎で学んだ人々のなかに進鴻溪や三島中洲がいます。彼らは、後に藩士となつて藩の要職を歴任したり、学頭となつて方谷の志を継いで活躍しました。

有終館の学習は、特に勝静が藩主になつてから「文なき武は誠の武にあらず」と剣、槍などの武術とともに文（儒学）の学習に力を入れるようになりました。藩士の子弟は七才以後、全員に有終館学習を義務づけ、文武で優れた人は更に藩費で遊学をさせています。有終館で学んだ人々が後に藩政を担い、大きな力を発揮しました。

勝静は寛政の改革をした松平定信の孫にあたります。伊勢桑名藩より松山藩

主の養子として迎えられ、二十二才で松山に入りま

す。彼の教育係として奥田楽山（前学頭）と方谷があたりました。方谷は勝静について「文学は家中及ぶ者無く、武術は毎日なされ（中略）承りますとこれまで夏の昼寝と冬の暖炉はなさいませんとのこと」と弟に伝えていきます。方谷は「資治通鑑綱目」という歴史書から中国の唐・宋の君主の事蹟を教えて討論し、君主としての政治の心構えを説き、藩政についても意見が交わされました。そうしたなかで君臣、師弟として心が固く結ばれました。この関係をのちの人が「水魚の交わり」といったほごです。やがて勝静が藩主となると、方谷は藩の行財政全般の仕事を行かされることになるのです。

牛麓舎跡（臥牛山の南麓にあつたのでこの名をつけた）

山田方谷先生家塾 牛麓舎跡



御殿坂（後方は高梁高校。当時、藩主の館・御根小屋がありました）



## 元締時代 — 財政をたてなおす —

山田方谷を取り立て有終館の学頭にまで用いた藩主板倉勝職は嘉永二（一八四九）年八月に亡くなりました。恩義を強く感じていた方谷は五十日間喪に服し、隠居を願ひ出ました。ところが十一月、新しい藩主の勝静に江戸藩邸に呼び出され、藩の元締と吟味役という藩財政を一手に担う役を命じられたのです。困惑した方谷は固く辞退しましたが許されず、十二月末に遂に引き受けることになったのです。方谷四十五才の時です。

しかし若い婿養子の勝静と農民出身の学者の方谷による藩政の実施に対する藩士たちの不安と反感は強く、江戸で「御勝手」に孔子孟子を引き入れて、なおこのうえに空にするのか」という狂歌が詠まれたほです。しかし、勝静は藩財政をたてなおすには方谷の起用しかない



藩主 板倉勝静肖像

一切許しませんでした。いう強い意志でその反対に屈せず、方谷への批判は

この藩主の信頼に答えるため、方谷は藩の会計簿など必要な資料を徹底的に調べて現状を的確に把握し、藩のたてなおしの策を作りあげ、藩主に示して実施していきまます。彼の藩政改革の要点をあげると、一、上下節約 二、負債整理 三、藩札刷新 四、産業振興 五、民政刷新 六、文武奨励でした。このうち、早急な改革を要した、

一、上下節約 松山藩は過去水谷氏の断絶で大きく領地を失って名目は五万石ですが実質二万石弱で莫大な負債を抱え辛苦しっていました。藩主勝静は嘉永三（一八五〇）年六月、松山に帰藩すると直ちに家臣を集め儉約令を命じ、期限を定めて藩士の給与の割カットを断行しました。衣服は綿織物、櫛などは木・竹に限り、足袋をはくのは十月から四月、飲食は一汁一菜、結髪・家政は人手を借りないなど厳しくぜいたくを戒めてい

ます。さらに奉行・代官などへのもらい物はすべて役所に持ち出し、入札で希望者が買う。巡郷の役人へは酒一滴も出せずに及ばず、役人への接待はせず、役人と商人が役所以外で会うのを禁じ、賄賂は厳重に禁止しています。藩主も綿服、粗食で通し、方谷も給与を一部返上しています。

二、負債整理 十数年前に起きた二度の城下の火災のためか新しい借財が多く、十万両に達し、年収の二倍にも及んでいました。その上利息が年間八、九千両になりました。そこで方谷は綿服で大坂に出かけ、金主の商人に藩の帳簿を示して実情を話し、これ以上の借銭はしないことを約束した上で従来の負債は新旧に応じて十年から五十年で返済したいと申し出ました。借金の一部帳消しや、利息の減免を受けることもあつて、大量の借金を大幅に減らすことができました。また大坂の蔵屋敷を廃止して、年間一千万の経費削減に成功した

だけでなく、藩米の販売権を藩が掌握して、藩財政を有利に展開しました。三、藩札刷新 天保時代に大量に発行した新五匁札がきっかけとなって松山藩の藩札の評判は悪く、にせ札も出まわり信用はなくなっていました。方谷は

就任した嘉永三（一八五〇）年、発行時積み立てた準備金すべてを使つて藩札を買い上げ、未使用のものも含めてこれを焼却しました。焼却は嘉永五（一八五二）年九月五日、高梁川の下町対岸近似川原と定めて町民に触れを出し、多数の見守るなか、朝八時から夕四時まで、元締役をはじめとして関係役人が総出動して大部分を処分し、かわりに新しく永銭を発行、両替を励行しました。永銭には百文、十文、五文札があつてそれぞれ、十枚、百枚、二百枚で金一両に引き替えるとの明文が裏に記されていたので藩札の信用は回復し、藩内はもとより他藩にまで流通するようになり、明治維新まで使用されています。



藩 札



## 元締時代 — 財政改革、豊かにする —

方谷は前頁一〜三の政策で、きびしい儉約令によって支出をおさえ、借財返済の見通しをつけ、藩札を整理して信用を回復し、健全財政への道筋をつけました。嘉永五（一八五二）年に郡奉行も兼ねて経済のみならず地方政治も掌握し、民政を安定し、富国強兵の方策を実施していきます。

**四、産業振興** 同年撫育方を置き、後述する収納米以外の一切の産物を扱い、その利益を産業振興などの

資金に利用しました。

備北の鉄山を開掘、城下の対岸近似村に山陰などから鍛冶職人を数十戸招き、良質の鉄製品を作らせました。備中鍛などの農具や釘は評判が良く、特に釘については会津藩士秋月氏が「当時釘を作り江戸へ漕売して一年三千両位に至る」と記されていますから、一両を十万円とみると三億円位の利益をもたらしたと考えられます。他に銅の利益もありました。山野に杉、竹、ハゼ、漆、

茶（津川のは高品質）を植えました。葉たばこを増殖し、城下の内職で刻み、「松山刻」として江戸から九州までも売り出し、織物を作り、また家中屋敷で柚子、柿を植え、柿餅子が作られました。農具、釘、反物その他城下で製作

した品は江戸に回漕して販売し、江戸藩邸の費用にあてました。

**五、民政刷新** 藩主勝静と方谷が最も重視したのが人々の生活の安定です。人の気持や風俗が向上すれば他領から人も金も集まり、藩は栄えると考えて特に力を入れています。学問をすすめ、ぜいたくを戒め、賄賂は厳禁、まず役人が行いを正して人々を指導するように求めています。

当時備中は支配違いの領土が入り込み、他所から来て悪事を働くものが多かったようです。方谷は強力な盗賊改方において辺境まで厳しく取り締まり、厳罰に処したので、戸を開けて寝ても安心といわれるほど治安が良くなり、賭博などの賭けごともなくまりました。安政二（一八五五）年になると改革の実があがり、借り上げで厳しい生活を余儀なくされていた藩士に対して、借り上げた一割

を返しました。

また農民への税を安くし、困っている村や庄屋に資金を援助して立ち直らせ、町民には商売の資金を援助しました。開墾を奨励してその資金を貸し、他所から来た人も入れ、新開地には税を免除、農民も農地も増加しました。また飢饉に備えて四十力所あまりの郷倉を設けました。

安政四（一八五七）年、方谷は元締を退きましたが、なお御勝手掛として財政や大事の決定には関与しました。この時までに借財はほぼ返して、新紙幣永銭による収入も含めて、撫育方にかなりのお金を貯えることができました。

**六、文武奨励** 方谷は藩士に有終館や江戸や野山（東



鉄製農具、備中鍛など（郷土資料館所蔵）

方の守りとして在宅武士が居住）の学問所で文武両道の修業をさせました。卒（下級武士）や町民、農民にも武士に準じた学問を奨励し、城下に鍛冶町教諭所、玉島に玉島教諭所、総社に矢田部教諭所を設けました。寺子屋も次々開かれ多くの藩民は学問を学び、人としての大切な心を育てていきました。

方谷は以前から藩の防衛に心をくだいており、世界情勢にも通じ、洋式の軍備の必要を悟り、弘化四（一八四七）年津山の天野直人に大砲の製法や銃陣を学びました。当時の武士は洋式戦術である号令による一斉行動を嫌ったので、郡奉行になると、農民を組織して鉄砲を貸し与え、農閑期に桔梗原で訓練し、千二百名の郷土防衛隊を創りあげました。第一次長州征討の時、藩主以下武士はほとんど出陣したので、方谷はこの農兵隊で藩の守りを固めています。

## 大役をはたす

改革の成功を聞き、多くの人々が方谷から学ぼうとこの地を訪れています。中でも河井継之助は安政六（一八五九）年から七年にかけての八カ月間も滞在し、方谷を師と仰いで密着してその心と方法を学び、のちに長岡藩で家老となり、改革を成し遂げています。

藩財政が安定すると、藩主板倉勝静は江戸幕府から寺社奉行を命ぜられ、最後は筆頭老中（幕政の最高幹部）となり、方谷も顧問として相談に与っています。



「長瀬塾図」方谷の塾舎（現・方谷駅西側）

しかし幕府政治の破綻を予知し、老中辞職を進言した方谷の願いは受け入れられず、慶応三（一八六七）年八月、方谷は帰藩して藩主に代わり藩政を指導することになります。のちに、「藩のことはすべて聞いてもらえたが、幕政のことは一つも聞いてもらえなかった」と嘆いています。

その年の十月に大政奉還、十一月に王政復古の大号令が出され、政治の実権は朝廷方に移りました。翌年一月、鳥羽・伏見の戦が起こりました。勝静は將軍慶喜について江戸に行き、朝敵として松山藩は備前藩の追討の軍を受けることになりました。

方谷は藩民を救うため朝廷への恭順を主張、藩地をさし出し降伏することに決めました。しかし勝静の行為を「大逆無道」と決め付けた鎮撫使側の文案に対し、方谷は「主君は誠実な人で反逆者や無道な人ではない、これを認めた



方谷先生の遺徳をしのんでつくられた「方谷園」

のでは臣下たる自分の義が立たない」と自決を決意、遺書をしたためました。使者の大石・三島・横屋による死を覚悟した嘆願の末「軽挙暴動」に書き換えがなり、無血開城にこぎつけました。ここにも方谷の義を重んじる心を知ることが出来ます。この時、君公警備で大坂にいた熊田恰は勝静から松山への帰藩を命じられました。しかし部下約百五十名と玉島まで帰ると備前藩に囲まれ、藩のため、玉島を救うために自決しています。

松山藩は朝敵として備前藩の支配下におかれました。方谷は行方不明となつた勝静の探索と藩の復活をめざして努力します。そし

て松山藩は板倉勝弼のもとで再興されましたが、高梁藩と改名しました。勝静も函館から無事救出され、安中藩で謹慎に入り、やっと安心して政治から退くことが出来たのです。

### ◇再び教える

方谷はおだやかで、よく学び、その知識をもとに深く考えて、良いと思ったことは誠意をもってねばり強く実行する、強い意志をもった人でした。晩年の方谷は後進の教育に尽力しています。

明治二（一八六九）年から長瀬（高梁市中井町西方）で、三年からは小阪部（新見市大佐小阪部）で家塾を開き、全国から集まつた多くの弟子を教育し、人材の育成に熱中する毎日を送るようになりました。明治四（一八七二）年にも、川田襲江を介して、新政府の財務局勤務の打診がありました。断つています。冬長瀬塾でのことです。

は寒くても火鉢を遠ざけ、じゅんじゅんと講義をして、いつも時間が長くなりましたが、「遺言として聞いて許してほしい」と言っていました。また、幼少者への講義を年長者が先生の代行を申し出ると、「私のお話を聞くのに来ているのであるから、一日に一度は話をしなければ」と断りました。

方谷は陽明学者である熊沢蕃山の建築がもとで建てられた閑谷学校の再建を願い、明治六年に再建されると九年七月まで、春・秋各一カ月ほど滞在して陽明学を講義しています。

明治九年九月以来、慢性水腫にかかり、病状は好転せず、明治十年六月二十六日帰らぬ人となりました。臨終に際して家人に命じて枕もとの机上に香を焚き、勝静より賜った短刀、小銃、王陽明全集を置き、悠然と息を引き取りました。享年七十三才でありました。

この冊子は、高梁市の広報紙「広報たかはし」(平成17年  
4月号～8月号)に連載されたものです。

発行 高梁市教育委員会  
高梁市落合町近似286-1